慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　１回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

平成30年度 入学式

医学部114名が入学

平成30年4月2日に慶應義塾大学入学式がパシフィコ横浜にて行われた。式典は午後3時より行われ、法学部、商学部、理工学部、別科日本語研修過程、文学部、経済学部、医学部、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、薬学部が参加した。

式典においては、開式ののちに青山藤詞郎常任理事によって学事報告が行われ、各学部の入学者数が発表された。本年度の入学者数は6528名、医学部114名、看護医療学部106名、薬学部214名であった。慶應義塾大学全体としても医療系学部としても昨年度の入学者数から大きな変化は見受けられなかった。

続いて、長谷山彰塾長により式辞が述べられた。塾長は、数多くの新入生が慶應義塾大学へ入学したことに対する喜びの言葉とともに、大きな変化の時代を生きる我々塾生のあり方について話された。具体的には、目の前の本質を見抜き、想定外の事態に対応する柔軟さを身に付けるためにリベラルアーツを学んでほしいということである。そして全人学的な教養を身に付けることで、主体的に自分自身の人生を切り開いていく独立自尊の精神を持った塾生になってほしいという激励のメッセージを新入生に送られた。

式辞に引き続き、長谷山塾長によって登壇者の紹介がなされた。

教職員代表式辞において文学部の山本淳一教授は、「自由」という言葉の意味を考え何事も目的を考えて取り組むことの重要性について述べられた上で、心身ともに健康で充実した学生生活を送り、実社会で生きていくための力を蓄えてほしいというお祝いの言葉で締めくくられた。

新入生代表入学の辞として医学部の阿部大誠さんは、慶應義塾において伝統と塾風を受け継ぎ、新たな時代を担う重要な役割を果たしたいという思いを語った。加えて、慶應の建学の精神を受け継ぎ、仲間たちと切磋琢磨していきたいという大学生活への期待が述べられた。

その後、卒後50年記念1968年（昭和43年）三田会寄付目録贈呈・挨拶として代表の佐治信忠さんからお話を頂いた。佐治さんは一日一日を大切にすることや、海外に目を向けることの重要さを強調された。

挨拶の後に1968年三田会からのご支援の贈呈が事務局長の金田康男さんによって行われた。

最後に塾歌の斉唱が行われ、晴れやかな雰囲気の中で閉式となった。新入生6528名の入学を喜ぶとともに、今後の活躍に期待したい。

（4年　大政遥香、倉堀智一）

入学式風景

新病院棟

5月グランドオープンに向けて

竣工引き渡しが完了

2016年3月より2年間に渡り進められてきた慶應義塾大学病院新病院棟（1号館）2期棟の建築工事がいよいよ完了し、設計施工を担当した竹中工務店から慶應義塾に建物が引き渡された。

2018年3月20日に行われた竣工引き渡し式には慶應義塾側から北川病院長、渡辺新病院棟開設準備室長や塾管財部長などが出席し、建物の巡回検査に引き続き、書類の交換などが行われた。

竣工引き渡し後は慶應義塾が直接行う工事や、什器・機器備品の搬入設置が行われる。

4月21日には義塾・病院による竣工式と施設見学会が開催され、いよいよ4月28日から病院各部門の移転作業が始まる予定である。特に5月の連休中に行われる入院患者さんの1号館への移送は移転プロジェクトの最重要ポイントであり、安全安心な移送を行うために移転を担当する日本通運と病院側とで綿密な打ち合わせを行いその日に備えている。

外来診療部門をはじめ検査・手術部門などは5月7日（月）のグランドオープンから本格稼働の予定である。

これら一連の移転作業に伴い5月1、2日は病院の臨時休診日となっており、三四会員の先生方にはご理解ご協力を賜りますようどうぞよろしくお願いいたします。

（新病院棟開設準備室　渡辺真純　64回）

東校舎側から見た新病院棟

2018年3月の信濃町キャンパス航空写真

竣工引き渡し式

第13回 白衣式

決意も新たに、医療の世界へ踏み出す

3月24日、平成29年度白衣式が、本塾北里講堂にて行われた。本塾では、2006年に日本初である第1回目の白衣式が行われ、今年で13回目を迎える。

式典には天谷雅行医学部長、北川雄光病院長、武田純三三四会長、秋山美紀環境情報学部教授らが列席し、臨床実習を控えた99回生（新5年）に祝辞を送られた。

天谷医学部長は、白衣を着ることの意味や、毎朝白衣を着ることで得られる緊張感などについて語り、慶應病院の新棟で臨床実習を行う99回生を祝福した。

北川病院長は白衣姿で列席し、自身が着ている襟の立った白衣のルーツについて述べた。また、「白衣は高い専門性や清潔さ、誠実さの象徴である一方で、前を開ける、ポケットに手を入れるといった崩した着方をすると威圧感や不快感を与える」と白衣の持つ影響力を語った。

一人の患者さんに対して、様々な職種・診療科がチームを組んで行うチーム医療や、クラスター医療などという視点から医療者間でのコミュニケーションの大切さや、医師のプロフェッショナリズムについて語ったのは武田三四会会長である。

なお、三四会からは同白衣式の記念品として、印鑑付きボールペンが99回生全員に贈呈された。

次に壇上に立った秋山教授は、自身が病気になった時の経験談を患者の目線から振り返った。当時の辛い心境や、医療従事者と患者間での言葉のとらえ方の違い、など新たな視点からプロフェッショナリズムについて99回生らに説いた。そして主治医がガイドラインそのままの治療ではなく、秋山教授にとって最善の治療を考え、命に寄り添うパートナーとなってくれたことなどを熱く語った。

その後、99回生の第2―第4学年の講義を担当した各科の教授からのメッセージビデオ（99回生白衣式委員会制作）が放映された。懐かしい先生方からの言葉に会場は和やかなムードに包まれた。

いよいよ白衣の授与となると、学生間には緊張や期待の混じった空気が張りつめた。そして学生らは順番に名前を呼ばれ、ひとりずつ医学部・病院の執行部の先生方、来賓の先生方に白衣を着せられていた。会場にはクラシコ社製、名前の刺しゅう入りの真新しい白衣に包まれた学生がずらりと並び、拍手が起こった。今年は例年同様、北里講堂に入りきらなくなるほどの父兄が参加し、父兄らの関心の高さがうかがえた。その後、99回生により、誓いの言葉が唱和された。

誓いの言葉は、有志により組織された白衣式委員会を中心に、99回生全員が協力して考えられたものである。唱和後には会場から一層大きな拍手が沸き起こった。

最後に、門川俊明医学教育統括センター長が閉会の辞を述べた。「99回生がこれから臨床に出て行くことについて、OSCEなどを見ているとまだ不安も残る」と語り始めた門川教授は、「現場で積極的に学んでいってほしいし、いずれは慶應の中などの居心地のいい場所だけでなく、少し居心地の悪い場所に出て行くことでより成長できる」と語り、99回生を激励した。

この白衣式を行うことで99回生は医療界の門戸を叩き、実際の臨床現場に出て医療および医学をより深く学んでいくことになる。4月から始まる臨床実習で悩み迷うことがあっても、初心に帰って誓いの言葉を反芻し、日々研鑽を積んでいきたい。

（文責：5年　松井優子、写真：6年　阿部雄志）

これから臨床実習に臨む99回生たち

医師としての自覚を培う

99回生　誓いの言葉

我々99回生は、
医師を目指した初心を胸に刻み、
誠心誠意、患者さんに向き合い、
信頼される医師たる品格を持つことを誓います。

心身共に鍛錬を重ね、
目の前の患者さんのため、まだ見ぬ患者さんのため
日々努力を続けることを誓います。

積極的な自学自習により、
日本・世界をリードする医師・研究者になることを誓います。

JKiC産学医連携の取り組み

高度な素材と化学製品開発を促進するJSRグループの化学研究者と慶應医学部の研究者・医師による産学共同研究拠点「JSR・慶應義塾大学医学化学イノベーションセンター（JKiC）」の4つの取り組みを紹介します。

領域2 Stem Cell Biology & Cell Based Medicine「幹細胞生物学と細胞医療」

大学院医学研究科委員長
生理学教室教授　岡野　栄之（62回）

JKiC産学医連携における「幹細胞生物学と細胞医療」の取り組みは、小さな臓器「オルガノイド」に着目し、その技術開発と実用化を目指すものである。

iPS細胞をはじめとした幹細胞活用の2本柱といえば、〝移植医療〟と〝創薬研究〟といえる。本学においても、これまで幹細胞の顕著な研究業績を数多く報告しており、神経・心臓・筋肉・腸管・皮膚など、まさに全身に至る細胞の分化誘導技術を進歩させてきた。さらに、シャーレ内において、病変や損傷組織に対して移植可能な細胞を調製したり、疾患患者iPS細胞由来の体細胞から病態メカニズムの発見と創薬を目指した研究も盛んだ。

さて、従来の幹細胞分化培養技術は、特定細胞を標的とした強制的な培養が主流であった。しかし、実際に出来上がった細胞が2次元培養下のシャーレの中で臓器のようにふるまうことはなかった。「領域2」プロジェクトでは、3次元培養技術と細胞の自己組織化能を駆使して、まさに実際の臓器を模した機能的細胞集団を作り出し、社会実装するかたちで医療・科学に貢献するものである。

アルツハイマー病（AD）を例に挙げよう。ADは国内外で産学問わず非常に多くの研究者が日々粉骨砕身している。AD研究の難しさとして、その病態がマウス等の脳では再現困難な側面が数多くある点、また患者や予備群の人の生きた脳への侵襲的なアクセスはほぼ不可能である点、さらには大量の実験動物の使用は可能な限り避けたい点がある。このような場合、ヒトiPS細胞由来の脳オルガノイドは非常に有用となる。ただし、主な病変部位といえる大脳皮質をシャーレ内で作るとき、脳細胞は無秩序に存在しているわけではなく、それぞれ異なる機能を有する層構造と、それを整然と構成する個々の細胞も極めて多様で難解だ。これらをクリアし生体に近い機能的大脳皮質を再現することは、AD患者脳をシャーレ内で取り扱う研究を可能にする強力な武器になる。

具体的に「領域2」では、現在2つの戦略プロジェクトを中心に展開している。1つは、生理学教室岡野研究室の石川充特任助教らによる、上述した脳オルガノイドプロジェクト。製品グレードとなるiPS細胞由来の神経疾患モデルのオルガノイド作出を目指すとともに、その効率的培養方法とマテリアルの技術開発を行っている。また、将来的課題として、血管網が入り込んだオルガノイドの作成、さらにはorgan on a chip技術との組み合わせによる創薬への応用があげられる。また、領域2では消化器内科の佐藤俊朗博士を中心とした腸管オルガノイド培養技術を用いた、大腸がん等を標的とする研究プロジェクトにも取り組んでいる。人の腸管上皮細胞から3次元培養により組織様構造を形成させ、がん組織のモデルを作出する。特に、これまで困難であった大腸がん幹細胞の動態を可視化する技術を取り入れ、創薬や移植に繋がるマテリアルの製品化を目指す。

JSR株式会社の有する技術の強みは、培養までの基盤技術など周辺技術に明るい点である。この利点とこれまで培ってきた慶應義塾大学医学部の幹細胞研究を組み合わせ、オルガノイドを作るバイオ条件を最適化し、オルガノイドとその培養マテリアルを製品化につなげることができると考えている。

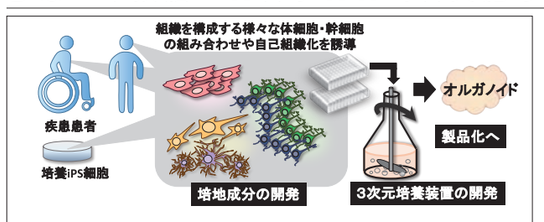

図　オルガノイド生成と製品化
患者の体組織あるいはiPS細胞から分化誘導技術を駆使し腸管や脳のオルガノイドを作成する。その培養マテリアルおよびオルガノイドの製品化を目指す。

WHO地域事務局長選挙に立候補へ

世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局次長（兼総括事業管理部長）　葛西　健（69回）

慶應義塾大学医学部は、創設以来100年にわたり、日本の医学医療を先導して来られました。そして、新たな歩みを始める本年には、待ちに待った新病院棟が開院すると聞いています。また、国際保健の分野に目を転じてみると、今年はプライマリーケアの提唱から40年の年であり、より健康な世界の構築に向けての機運が高まる年でもあります。このような新たな息吹に満ちあふれた年に、世界保健機関（WHO）では、西太平洋地域で新たなリーダーシップを確立するための選挙が10月に行われます。この度、私、葛西　健（かさい　たけし）は、日本国政府のご推挙により立候補する決意を固めました。ご案内のとおり、WHOは、本部（ジュネーブ）と6つの地域事務局から構成され、日本が属する西太平洋地域事務局はフィリピンのマニラに置かれ、その長である地域事務局長は域内の国等により選挙で選ばれ、大きな権限と自律性を持っております。

この地域には、日・中・韓・豪から島嶼国まで37の国・地域があり、19億の人口を擁します。健康長寿大国であり、G7やG20の場で国際保健を主唱している我が国は、特別な関心と責任を有しています。ここで、抱負の一端として、重点的に取り組みたいことを3点述べてみたいと思います。

まず、第一が、感染症を中心とした健康危機管理です。直近のインフルエンザパンデミック4回のうち3回がアジアから起きるなど、アジア太平洋地域は感染症の震源地として知られています。特に、2020年東京オリンピック・パラリンピックを控えた我が国にとって、本件は焦眉の課題であり、ペストが猖獗を極める香港に乗り込み指導をされた北里柴三郎先生の姿を胸に、しっかり対応してゆきたいと思います。

次に高齢化と非感染症対策です。アジア諸国の高齢化のスピードは極めて速く、既に超少子高齢化社会を迎えている我が国の経験・技術・医薬品などへの期待は大きいものがあります。それゆえに、この分野は課題であるとともに機会（チャンス）という側面もあります。

最後が、新しい政策展開手法です。いままで、国連機関は、ともすれば上から目線での「指導」というアプローチをしてきましたが、これからは政策対話を重視してゆきたいと思います。三四会会長を長らく務められた武見太郎先生は、「未来からの反射」という言葉を使い、常に長期的視野で現在の課題を冷徹に見つめ、地域ぐるみの健康への投資を主張されました。

私には、熱い抱負と100年の慶應医学の重みがあり、今まで多くに先輩方にお教えいただきながら歩んできた国内外での公衆衛生行政28年の経験もあります。慶應医学の伝統を更に発揚すべく精進して、アジアの人々の健康に貢献する決意であり、皆様からのお力強いご支援・ご鞭撻をお願いしたいと思います。

第115回慶應義塾大学医学部生涯教育研修セミナー

日　時　平成30年6月9日（土）午後3:00～6:20
場　所　ハイアットリージェンシー東京　地下1階『桃山』
開会の辞　生涯教育研修セミナー委員会副委員長　菅沼　安嬉子
挨　拶　医学部長補佐　坂元　亨宇
挨　拶　慶應医師会長　小川　郁

講演会　『がんゲノム医療の夜明け前』
モデレーター　北川　雄光
（慶應義塾大学病院病院長・慶應義塾大学医学部外科学（一般・消化器）教授）

1「難病・遺伝性疾患のゲノム医療から見たがんゲノム医療の課題」
小崎　健次郎（慶應義塾大学医学部臨床遺伝学センター　教授）
2「慶應義塾大学医学部腫瘍センターにおける、がんゲノム医療への取り組み」
西原　広史
（慶應義塾大学医学部腫瘍センター　ゲノム医療ユニット　特任教授）
3「がん研究が導くゲノム医療」
間野　博行（国立がん研究センター研究所　所長）

参加費　無料
日医生涯教育制度参加証交付　3単位（カリキュラムコード：7，9，10）
お問い合せ　慶應義塾大学信濃町キャンパス総務課内
生涯教育研修セミナー事務局
Tel：03-5363-3611　E-mail：med-somu-3@adst.keio.ac.jp

セミナー終了後に意見交換会を準備しておりますので、ご臨席ください。
次回セミナー開催予定：平成30年10月13日

鑑賞知来

今年も新入生が入ってくる。学生にとってはクラブへの勧誘が一大行事である。それはチームの存続がかかっているからである。私はアメリカンフットボール部（通称アメフト部）に所属していた。11人で行うスポーツで、オフェンスとディフェンスそれぞれに人数が必要なので、30人程度いないとチームが成り立たない。1学年5人は欲しいところだ。

アメフト部は64回生の渡辺真純さんが創設したチームで、当初は医学部生だけがチームに所属していた。今では、看護医療学部、薬学部を加え、いわゆる全塾アメフト部ユニコーンズの弟分として活動している。医看薬の頭文字をとってMNP。ユニコーンズMNPが正式なチームの愛称になる。

学生にいつも言っていることがある。医学部生がこれほど運動系のクラブ活動に専念する国は日本以外にない。アメリカであれば医学部に入る前のカレッジ4年間でクラブ活動に汗を流し、医学部4年間ではひたすら勉強をする。日本のケースは非常に珍しいからトコトンやれと言っている。

しかしこの珍しいケースも徐々に変わってきている。他校のアメフト部が人数不足で活動停止に追いやられている。授業が終わってから、あれだけ激しいスポーツをするのはよく考えてみると凄いことである。何よりもアメフトは痛い。新入生には「鍛えれば怪我もしないし痛くないから大丈夫」というものの、相当痛い。コンタクト系のクラブが医学部にあり存続し続けているのは本当に凄いことだ。しかも慶應に限ってはグラウンドが無いのに、である。

新入生は良いクラブに出会って欲しい。上級生も必死になってピカピカの一年生をつかまえてほしい。どのクラブも素晴らしく、伝統がある。学問、部活にトコトン打ち込んで、さすが慶應、さすが慶應の学生といわれる6年間を過ごしてもらいたい。

（精神・神経科学教室　田中謙二　76回）